

# 津波をテーマに話し合った

朝日小学生新聞は創刊50周年の今年、未来に関する様々なテーマで子どもたちが意見を交わす「こども会議」を開きます。第1回会議を先月29日、東日本大震災で被害を受けた宮城県仙台市で行い、「津波で亡くなる人を0にするには」をテーマに話し合いました。



テーマに話し合いました。仙台市の沿岸部、若林区荒浜地区を訪れると、そこにはこの6年間に大規模な復興が進んでいます。津波の力をやわらげる防潮堤、いざというときに逃げこめる「津波避難ビル・タワー」、津波の記憶を将来に伝える「震災遺構」。それぞれ、なぜこうしたものがつくられたのか、専門家や行政の人から説明を受けました。

午後には災害の専門家が集まる東北大学災害科学国際研究所（仙台市青葉区）でさらに考えました。難ビルには、高さ9・9メートルの屋上避難スペースなどがあります。参加した鈴木心晴さん（仙台市、4年）は「津波でこわれた小学校を見るのは初めて。津波の威力はすごいと感じました」。メンバーはそのあと東北大学へ移動し、震災の記憶を伝えるために何ができるかを話し合いました。この様子は後日お伝えします。

## 「津波の威力感じた」朝小「こども会議」仙台に



東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県仙台市の沿岸部を29日、朝小「こども会議」のメンバーが取材しました。写真。被害を将来に伝える遺

構として4月末に公開される予定の旧荒浜小学校校舎（若林区）では、校舎に残る津波のつめあとなどを見学しました。1月に完成した二木津波避

難ビルには、高さ9・9メートルの屋上避難スペースなどがあります。参加した鈴木心晴さん（仙台市、4年）は「津波でこわれた小学校を見るのは初めて。津波の威力はすごいと感じました」。

2017年4月18日付

2017年3月30日付

朝日小学生新聞

2017年(平成29年)4月18日 火曜日



## リアルに体感「次」に備える

東北大学災害科学国際研究所は東日本大震災後にできました。国内外の研究者が集まり、被災地の復興と、未来の災害を防ぐためにどうしたらよいかを研究しています。こども会議のメンバーは三つの班に分かれ、さらに取材を進めました。（猪野元健、今井尚、岩本尚子）



**アーカイブ班**  
被災した建物内部を仮想現実で体験しました



**古文書班**  
被災した古文書をじっくりと見ると、天野さん（右）が教えてくれました



**津波の3Dと堆積物班**  
津波堆積物を特別にさわらせてもらいました

### パソコン200台分の記録に学ぶ

復興のために取りこむべき情報は、被災した建物や船などの立体情報として保存されています。岩手県陸前高田市で被災し、すでに取りこまれた公民館の立体映像を見せられました。ふたつの映像では、建物の形や被害の様子を位置情報で記録しているため、将来、実物大のミニチュア模型として再現できます。柴山さんは「記録を集めるだけでは不十分です。記録をもとに、過去の災害をより多く学ぶことが、より多様な防災が実現する」と考えています。

### 歴史資料をきれいにし保存

東日本大震災では、家の中の家具なども津波の被害にあいました。どうしたらいいか、家の中からは、家に代々伝わる古文書などの歴史資料が見つかることがあります。天野真志助教（歴史資料保存学）の研究では、東日本大震災や熊本地震の被災地、水害にあった茨城県常総市などから、被災した紙の資料を集めています。天野さんはボランティアの力を借りて、資料をきれいにし、その地域の保存を進めています。ぬれた古文書の水分をフリーストライの機械で

### 3D映像で津波を「感じる」

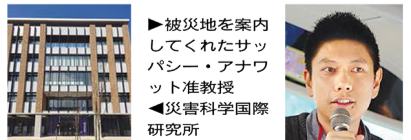
高さ2・6メートル、幅10メートルの大きなスクリーンに映し出されたのは、ものが飛び出して見えたり奥行きを感じたりする3D映像です。メンバーが特殊なメガネをかけて見ると、津波が建物をおそっていくのが立体的に映りました。この研究は、幸田賢二郎教授（計算力学）によるものです。コンピュータで災害のようすを立体的にあらわすことで、実際に災害の現場にいるような体験ができます。「災害のこども被害を、より強く感じてもらいたい」との思いで行動したらしい

東北大学で専門家の研究を学んだメンバーは、班ごとに自分の意見をまとめ、所長の今村文彦さんの前で発表しました。

### 私たちの考えた防災案



参加したメンバーら



被災地を案内してくれたサッパシー・アナパット准教授  
災害科学国際研究所

### 声かけながらにげる／50人に1か所の避難所／救助マップ

津波の時、すぐに避難できるような、たくさん避難所をつくる。高橋慶子・宮城県・4年。住民50人あたり1か所くらい、ひなんじよをたたく（小原洋多・岩手県・3年）。アーカイブ班 このじんのことを多くの人たちが知って、今ある物を多くしたり、新しいものを作る（菊地祥・埼玉県・6年）。タワーやビルに部屋を増やす（高橋慶子・宮城県・中1）。防潮堤の内陸側の地面をすく（し）テコボコにする（内山通希・岩手県・6年）。一人一人が津波が起きた時のちしきを待つ（五十嵐菜々・福島県・4年）。救助マップを作る（鈴木心晴・宮城県・5年）。

### 答えは一つでない

たぐいさまざまなアイデアをいただきました。救援マップ、多重防御避難ビル、これらは大人たちが考えています。みなさんの話し合いの中で、「お年寄りのために」と呼びかけをした方が、



「防炎は、これが正しいという一つの意見に決めることはできません。災害の種類や、地域の様子によっても答えはちがうからです。たくさん意見を出し、良いところを集めることが大切です。」



取材したことを1人ひとりが新聞にまとめました。こどもたちの新聞はこちら（[asagaku.com/kodomokaigi/saigai/index.html](http://asagaku.com/kodomokaigi/saigai/index.html)）。

